

書 評

堀 忠 著

『レプラと奇跡——脱神話化と脱医学化に向けて——』

レプラ（の人）を生まれてはじめて「見た」のは、中学生か高校生の頃、テレビで放映された映画『ベン・ハー』においてだった。主人公ユダ・ベン・ハーの母と妹が、イエスの奇跡によってあの不治の病いから解き放たれるエンディングは強く印象に残っている。確認のため再見してみると、英語の台詞で彼女らはたしかに *lepers* と呼ばれているが、字幕ではたんに「死の病い」「重い病い」となっている。大昔のテレビ吹き替え版も同様な表現だったと記憶している。フィクションである映画の中のイエスの奇跡が、マタイ、マルコ、ルカ一連の福音書中でくり返し語られる、不詳の「らい病人」の男をイエスが清めた逸話のヴァリエーションであることは言を俟たない。しかし、その新約聖書中の「らい病」表記が現在では「重い皮膚病」に置き換えられているのは周知のことであろう（ちなみに評者所有の、日本聖書協会1985年刊行版『新約聖書1954年改訳』ではまだ「らい病」「らい病人」である）。

差別問題としてのパラダイム転換もかかわって、「レプラ」をめぐる「ことば」と「神話」は重層的で複雑だ。イエスの清めの逸話がはたして「ヒストリカル・パスト歴史的過去」としてどこまで事実であるのかということとはともかく、ヘブライ語原典の旧約聖書・新約聖書の「ツァラアト」に対する、ギリシア語聖書（以降）の「レプラ」という訳語がはたして適切なものであるのか。あるいは、ツァラアトにしる、レプラにしる、それらの語彙は、1873年のアルマウエル・ハンセンによるらい菌発見以降の、近現代医学上の疾患・症例名としての *Hansen's disease* にどのように連続し、あるいは断絶しているのか。いやそもそも言語とその指示対象との関係はまったく恣意的なものである以上、純粋な自然科学／医学の公理にしたがう普遍的定義——そのようなものが存在しうるのかどうか知

らぬが——でないかぎり、レプラおよびその関連諸語の意味内容は、それが属する時代・空間の社会的・文化的コンテクストに依存して変容し続けてきたのであって、連続も断絶もいったん留保されねばならない。それゆえ、「レプラ」という「ことば」の正体を根源的につきとめるべく、それを織り込む言説を解体し、そして「神話」をあばくことが厳然たる課題としてある。その課題に、ギリシア古代医学文献から、旧約聖書・新約聖書をへて、7世紀までのキリスト教著作家の記述をたどることにより、取り組んだのが本書である。

本書は、まず諸学術機関のギリシア語文献データベースを利用して、レプラおよびその関連諸語を含むテキスト箇所を検索・抽出し、その客観的な数値の分析を提示する。つづいて、該当諸語について、逐一、関連文献・関連研究と照らし合わせ、検討しながら、意味をたしかめ、解釈を施していく。いわば量的／質的の両面アプローチであり、ここには、医師にして神学者という著者の二つの側面が反映しているようにも感じられる。データベースは物理的労苦と空間的制約を極小化してくれるが、ナマの身体的過去にふれえないというハンディキャップもある。「あとがき」において、データベースへのヘビーな依存という手法については批判を覚悟する旨述べられているが、むしろ万人に開かれた（デジタル）パブリック・ヒストリー時代の先導者の試みとして、評者は強く支持したい。

さてさまざまなレプラ関連諸語中、後世への影響という点で最も重要なのはエレファンティアシスであるという。古代ギリシア以来、特異な皮膚病変をともなる重篤疾患に対して用いられてきたこの語は、医学ではなくあくまで宗教・祭祀的範疇に属していた語としてのツァラアト、レプラと本来交差するものではけってなく、七十人訳聖

書以降の翻訳作業では慎重に区別がなされていた。ところが、4世紀末から5世紀初頭以降、キリスト教文献中に浸透・定着し始め、とりわけキュリオスの言説が両者の混淆に決定的な役割を果たした。一方、宗教的な罪と視覚的・身体的な病いを明確に区別するクリュソストモスのような大家もいた。それでも時代をくだるにつれ、二つのスティグマの融合は不可避的に進み、そのままハンセンの時代へといたる。今、評者がためにランダムハウス英和大辞典を引いてみると、leperには「(人に)避けられる人、忌みきらわれる人」という隠喩的用法がある。本書は、おそらくは依然としてアクチュアルで深刻な状況を見ずえてであろう、提言的にこう結語を示す(レプラは)「後世に付加された過剰な「神話」をことごとく削ぎ落したうえで、ふたたびその出自たる古代の祭祀の世界に戻されてしかるべきだろう」。すなわち「脱神話化と脱医学化」である。

ところで、病いを穢れとして排除するユダヤ教、罪として救いと赦しを与えるキリスト教(竹下節子『疫病の精神史』ちくま新書、2021年)、このコントラストについて著者にコメントを求めたいのだが、的はずれであろうか？

「序論」で、ソシュール言語学、フーコー考古学、デリダ脱構築などを引用しながら「レプラとエレファンティアシスをめぐる「記号体系」を生み出す「前時代」の言説とそれを取り巻く「社会的事象」を視野に入れた研究」を宣言する本書には、ポストモダン歴史学の支柱をなす言語論的転回(=構築主義)が通奏低音として響いている(もっとも言語論的転回といっても、歴史研究に直接大きな影響を与えたヘイドン・ホワイトの「歴史の詩学」「歴史の喩法」はソシュールやデリダとの関係が意外と希薄であることを蛇足ながら付け加えておく)。隔離政策は是か非か、善か悪かといった倫理的議論の位相を超えてあらたな地平を切り拓いただけにとどまらない。現代歴史学一般に刺激を与えるところ大なる成果であり、その評価が、ハンセン病史、キリスト教史、医史学など狭い領域に押しこめられたりしては惜しい書である。

(平井雄一郎)

[新教出版社、〒162-0814 東京都新宿区新小川町9-1、TEL. 03 (3260) 6148、2022年7月、A5判、279頁、5,400円+税]

青木歳幸、W・ミヒエル 編

『天然痘との闘い III 【中部日本の種痘】』

本書は青木歳幸氏を代表とする科研費研究による研究成果であり、九州編・西日本編に続くシリーズ3巻目となる。続く東日本編をもって全4巻で完結するとのことである。九州編については本誌第65巻1号に鈴木友和氏による書評、西日本編については同第68巻1号に渡部幹夫氏による書評がある。本稿では、前段で本書が対象とする中部日本の種痘史研究における本書の意義、後段で本シリーズを通して明確化されつつある種痘史研究の論点について述べたい。

まず、中部日本の種痘史研究における本書の意義は、①これまで研究蓄積のある地域の種痘やその担い手に関する再調査・新知見と、②既存研究

が乏しい地域の種痘に関する新規研究の開拓とに、大まかに分けられよう。①としては信濃や三河の総合的な種痘史像の解明、②としては福井藩・鯖江藩による出張種痘や越中の明治初期の種痘政策、甲斐の種痘伝播ルートの整理などが挙げられる。過去の研究に用いられた史料のうち、少なくとも一部分が行方不明や滅失の状態にあることも判明し、継続的な調査研究や資料保存体制の重要性も痛感される。①②に加えて、③人物ベースで見ても、伊藤圭介や大垣江馬家の尾張・美濃・飛騨を中心とした広域的・横断的な役割が改めて明らかになった。人物ベースの種痘伝播の物語には武勇伝的・紋切り型のエピソードがつきもので